

## ごあいさつ

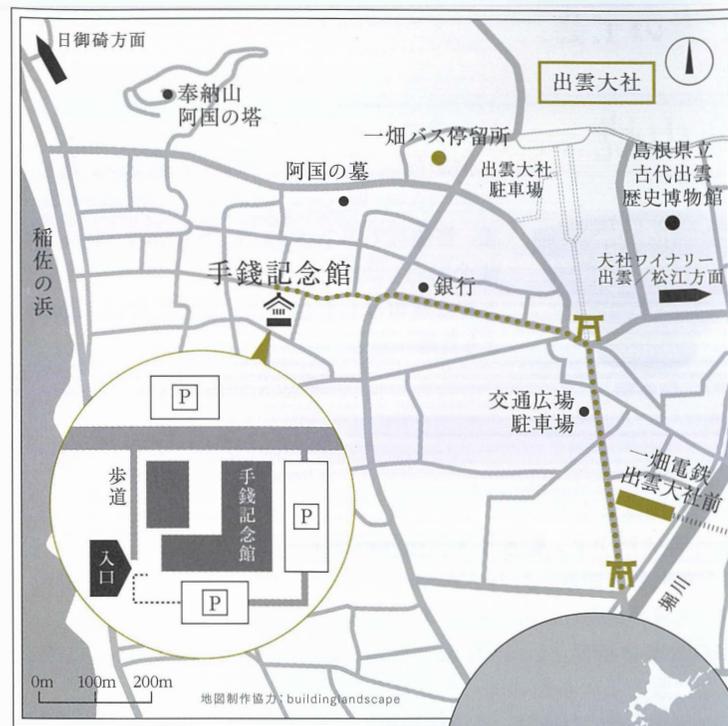
地方の美術館は、その地に保存されてきた美術品の展示と共に、郷土の先人達が作り伝えてきた作品の展示を通して、地元の人々にとっては祖先の暮らしを偲び省みるよすがとなり、旅して訪れられる方々には当地の文化を知る手だてとなることに、その存在が意味づけられると思います。

出雲地方における美術工芸といってもその歴史は浅く江戸時代以後になりますが、ほかでは見ることのできない地方色をもっております。当館の列品によって自分たちの周辺に残る種々の器物にその美を再発見していただき出雲の風物と共にその環境の中に生まれた作品を通して、当地方の暮らしの文化を一層深く知っていただきたいと思います。

館長 手銭 白三郎

## 手銭家について

手銭(てぜん)家は江戸時代、貞享三年(1686)から大社に住まいし、明治維新までは造り酒屋を営んでいました。名字帯刀を許され、藩主や藩の重役の宿となることもあった豊かな暮らしぶりと、代々の当主が漢詩、俳句、茶道、華道といった趣味を愉しんだことで、様々な分野の美術工芸品があまり、保存、管理されてきました。



### [交通案内]

- ・出雲大社より徒歩10分
- ・出雲大社前駅(一畑電鉄)より徒歩15分
- ・JR出雲市駅より車で20分、バスで30分
- ・松江市より車で50分

◎開館時間=9:00-16:30

◎休館日=火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日)、年末年始、展示替期間中

◎入館料=大人:800円(20名以上の団体600円)

高校生以下:無料

◎所在地=島根県出雲市大社町杵築西2450-1

◎電話/FAX=0853-53-2000

### ◎第二展示室のご利用案内

第二展示室の奥にはミニ・コンサートができるような空間と舞台があります。ピアノもありますので、ピアノ、器楽、声楽、邦楽等の発表会・コンサートなど、様々な用途でご利用いただければと考えております。お気軽に、手銭記念館(TEL:0853-53-2000)までお問い合わせください。



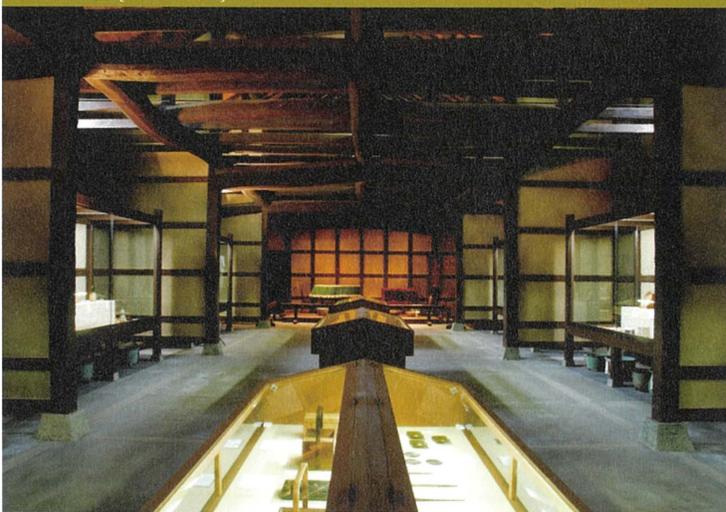
## 手銭記念館について



第一展示室 [企画展示]

手銭記念館は平成五年(1993)四月に開館し、おもに出雲地方の美術や伝統工芸などを展示しております。第一展示室では企画展示を行い、広く日本の美術、工芸、文化を紹介し、第二展示室では、常設として地方色ゆたかな陶磁器、漆工、金工、木工などの美術工芸から日用品々まで、数百点を展示しています。記念館の建物は、江戸時代に建てられた米蔵と酒蔵です。酒蔵は安政七年(1860)に完成したものの、明治維新とともに酒造りをやめ、その後、明治三十六年(1903)まで小学校舎として使われました。土蔵群の静かな空間とともに作品や庭園を鑑賞していただきながら、ゆっくりお過ごしいただければと思います。

第二展示室 [出雲の工芸]



## 出雲の工芸

### 楽山焼

らくざんやき



「彫三島茶碗」  
倉崎権兵衛・17世紀後半

松江藩主の別荘のあった松江市の東郊、楽山に窯があり、楽山焼と呼ばれる。創窯は、寛永十五年(1638)頃と考えられている。楽山焼中興の祖・長岡住右衛門貞政は、享和元年(1801)不昧公に召し出され、専ら茶陶や不昧公の意匠による高麗の写しを焼いた。二代空齋は、藩命により長崎へ赴き、色絵の技法を学んでいる。

布志名焼は楽山焼と併せて出雲焼と呼ばれ、寛延三年(1750)に、船木与次兵衛村政が実子三人と布志名で開窯したのが始まりといわれる。藩窯と民窯が共存した陶業集団のようなもので、独特の黄釉を特色とし、不昧公時代は、安南、交趾など南方系の茶器の写しや京風のものも多く、その後も色絵、仁清写・乾山写などの京風陶器や、伊万里風、瀬戸風などの作品が多く造られた。明治に入ると輸出物として黄釉地に本金その他で文様を施した美しい陶器なども手がけた。

### 布志名焼

ふじなやき



「仁清鷺ノ山写長茶入」  
永原興造・19世紀

### 漆壺斎

しっこさい



「秋野棗」  
初代小島漆壺斎・18世紀後半

初代小島清兵衛は京都の塗り師堅地屋清兵衛の子であったが、寛永十六年(1639)、招かれて松江藩の塗師棟梁となったと言われる。五代清兵衛は江戸で当時随一の名工と言われた原羊遊齋(はら ようゆうさい)に師事して蒔絵を学び、不昧公お好みの茶器などを数多く製作した。漆壺斎の号は不昧公より与えられたものである。

初代勝軍木庵光英(1802-1871)は本名を三島屋宗悦といい、松江市白濁灘町に住む蒔絵師であった。九代藩主斉斎(直指庵)の命で江戸の蒔絵師・梶川清川に師事し、直指庵の好み物を多く作ったので、直指庵から「勝軍木庵」の号を与えられたと言われる。二代勝軍木庵春光(1848-1906)は、幼名宗太郎または英一という。のち姓を勝木と改め大阪で蒔絵を続け、明治三十九年没した。

### 勝軍木庵

ぬるであん



「竹鶴蒔絵木瓜形軸盆」  
勝軍木庵光英・19世紀

## コレクション

### ■曾我蕭白(そがしょうはく)

江戸時代中期に生まれ、「異端」「狂気」の画家とされるが、手銭記念館蔵の四季山水図押絵貼屏風は蕭白の作品の中では端正ですっきりとした作品である。



### ■堀江友聲(ほりえ ゆうせい)

堀江友聲は、享和二年(1802)島根県雲南市大東町に生まれた。松江で学んだ後京都へ出て、中国諸派の絵画や円山派の彩色法など様々な技法を会得し、諸国を遊歴、51歳で広瀬藩に招かれて藩士となった。出雲地方の画壇では最も高名な画家の一人で、多くの作品を残しており、門人も多数養成した。



### ■刀剣

日本刀の魅力は、刀身の素晴らしさもさることながら、鞘(さや)、鐔(つば)、小柄(こづか)、筭(こうがい)、縁(ふち)、頭(かしら)、鑑(こじり)、と隅々まで技巧と教養を凝らした拵え(こしらえ)にもある。当館では、所蔵する室町時代から江戸時代までの刀身と拵えを企画展で展示している。



### ■西田幾多郎(にしだ きたろう)

西田幾多郎は、『善の研究』など数々の論文を発表した、我が国を代表する世界的哲学者。京都時代に西田が散策した道は、今も『哲学の径』と呼ばれて親しまれている。初代館長・十代手銭白三郎は昭和初期に西田の知遇を得た。

### \*その他のコレクション

古文書・古書、茶道具、美術工芸品